

修 士 論 文 要 旨

看護学専攻	生涯看護学 分野 小児看護学 領域	学籍番号 216602 氏 名 上杉 佑也
論文題目	医療的ケアを必要とする重症心身障がい児の父親が在宅での新たな生活を作り上げる過程	
キーワード	父親 医療的ケア 在宅 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ 重症心身障がい児	
<p>【背景】 医療的ケアを必要とする重症心身障がい児（以下、重症児）を在宅で養育している家族は、心身ともに疲弊している現状にあるといえ、母親はこのような状況において、生活様式や価値観を変化させたり、周囲からの影響を受ける中で新たな生活に適応している。一方で、生じるストレスや苦悩は自身で解決する傾向にあるという特徴を有し、母親と同様に困難な状況にある父親が、どのように在宅での新たな生活を作り上げていくかについては十分に明らかになっていない。</p> <p>【研究目的】 医療的ケアを必要とする重症児の父親が在宅での新たな生活を作り上げる過程を明らかにする。</p> <p>【研究方法】 研究承諾の得られた重症児が通院する医療施設より紹介された、在宅で医療的ケアの必要な重症児を養育し、本研究への参加に同意の得られた父親 10 名に、平成 30 年 7 月から 10 月にインタビューガイドに沿って半構成的面接を行った。重症児は虐待例を除く 18 歳までの年齢で、何らかの医療的ケアを要し、日常生活に全面的に介助が必要な子どもとした。分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した（通知番号 175502）。</p> <p>【結果】 方法論的限定により 1 人親家庭の 1 名を除外した 9 名を分析対象とし、4 の《カテゴリー》、9 の【サブカテゴリー】、27 の【概念】が生成された。生活を作り上げる過程として、父親は【新たな生活に戸惑い】を生じながらも【目の前の事で精一杯の日々の暮らし】を送りながら《右往左往する生活》を過ごしていく。重症児の落ち着きを感じ、母親に重症児の世話を頼る中で、自分も重症児の世話を行えるという【自信の獲得】が《生活の根幹をなす安心》となり、【心のゆとりによる行動の広がり】をみせると同時に、【我が家のライフスタイルの模索】をしながら自分たちのペースを創っていく。一方で、改めて【生き辛い社会】を認識することとなるが、このような生活の中で、《子どもと共に生きていくことを支える力》となるのが、【子どもと共に生きていくことを引き上げる周囲の力】や父親自身の【子どもと共に生きていくことを後押しする気持ち】である。このような支えを糧にして様々な経験を乗り越える中で、【物事の受け止め】ができるような精神的な成長を遂げ、《我が家のペースが創られた生活》を確立していく。</p> <p>【考察】 一般的に、男性には職業上の成功や男らしさが求められ、[子どもに合わせた働き方]に生活を変化させること自体にも葛藤が生じたり、[弱さを見せない]という価値観により社会的孤立に陥りやすい状況にあると考えられる。そして、情報不足に陥ることで、自身の役割遂行に対して母親からの評価を気にすることに繋がり、自身の父親役割に自信が持てずに自己効力感が低下しやすい状況にあることが伺えた。一方で[弱さを見せない]という気構えが生活の原動力となっていたり、仕事により他の家族との接触が乏しい状況の中でも、交流により共感や情報共有できることに価値を見出している父親もあり、父親の状況や特性に合わせた支援を行っていく必要が示唆された。</p>		